

『デジタル時代の子どもと絵本・本』

発達心理学からみた 絵本の役割と子どもの育ち

—物理的素朴さが生み出す発達の豊かさ—

遠藤 利彦

(東京大学)



The Center for
Early Childhood Development,
Education, and Policy Research

1

東京大学Cedep共同研究



株式会社ポプラ社と東京大学大学院教育学研究科附属 発達保育実践政策学センター（以下、東京大学Cedep）は、子どもを取り巻く読書環境の改善を目的とし、“本”の価値を科学的なアプローチで明らかにする「子どもと絵本・本に関する研究」プロジェクトを2019年8月より、共同で行っています。

ポプラ社では「ひとりでも多くの子どもたちを本好きにしたい」という思いから、今こそ“本”の価値を科学的研究の見地から見直すべきと考え、乳幼児や絵本に関する知見が豊かで、産官学との協創探究を目指す東京大学Cedepと、この共同研究に取り組んでいます。

本研究では、子どもの発育発達プロセスにおける絵本・本の固有性や、認知能力・非認知能力の発達への寄与の可能性、保育園・幼稚園での絵本をとりまく環境などを、科学的アプローチによって明らかにしていくことで、デジタルメディア時代の絵本・本の新たな価値を発見し、その研究成果を広く社会に向けて発信することで、未来の子どもたちにより豊かな読書環境を提供することを目指しています。



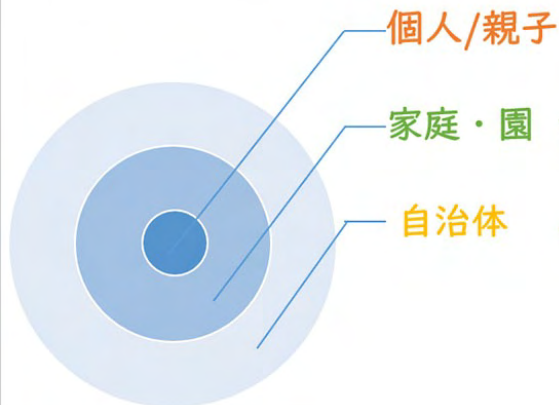
▲（左から）東京大学教育学研究科Cedep:野澤祥子、東京大学教育学研究科長:秋田喜代美、株式会社ポプラ社代表取締役社長:千葉均、東京大学教育学研究科Cedepセンター長:遠藤利彦

2

子どもを取り巻く絵本・本環境を多層的・多面的に研究し、
絵本・本の新たな価値の発見と生成、環境改善を目指す

中核的な問い：

- ①絵本・本には子どもや親子にとって固有の意味や価値があるか？
- ②家庭や園における絵本・本の量や環境の質には、多様性や格差があるか？それは子どもの発達に影響するか？
- ③絵本・本に関する環境づくりに関して参考になる園や自治体の先進事例が国内外にあるか？



①実験研究

- 絵本・本と動画等他のメディアに対する子どもの反応の違い
- ※行動、視線、脳波等

②調査研究（家庭・園）

- 絵本・本の量・種類
- 絵本・本の環境構成（置き方、提示方法）
- 絵本・本の入手方法、予算配分
- 読み方等の発達的变化
- 他のメディア環境

③事例研究

- 絵本・本の環境づくりに関する園・自治体の先進事例
- 絵本・本環境づくりに関する海外の先進事例

3

子どもの心は 相互作用の中で育つ

4



ヒトの子どもは脆くて弱い



子どもは生物学的実体としては
きわめて脆弱であり、そしてだからこそ
集団として協同ケアしなければならない



5



しかし ヒトの子どもは無力ではない



子どもは他者を自身との相互作用に巻き込み、
自身の個性に沿った情報収集を効果的に進める
という意味では実に有能・能動的・個性的である



6



赤ちゃん観の移り変わり

無力 → 有能

受動的 → 能動的

無個性 → 個性的



「赤ちゃん学革命」

7



赤ちゃんの「もの」の理解

- 「視覚」以外は胎児期から既に発達
- 赤ちゃんは生まれてすぐにもものの世界を理解
ものは見えなくてもなくなる(永続性)
一緒に動くものは一つ・ものは溶け合わない
ものはひとりでに動かない……
- 生物と無生物・固体と非固体を識別
- 数の理解: かんたんな足し算・引き算ができる
- 初めから見え・音・感触等を互いに対応づける

8

赤ちゃんの「ひと」の理解

- 赤ちゃんはとにかく「ひと」が大好き
- 顔・声・動き・におい……
- 赤ちゃんはつい「ひと」にシンクロする
- 新生児模倣・共鳴動作・感情伝染……
- 少なくとも見た目はとても「おしゃべり」
→まわりのひとを相互作用の中に引き込む
- 「わたし」と「あなた」の心の区別も1歳代から
- 「心の理論」も1歳代から？

9

「性善説」か「性悪説」か？

- ヒトは、「見境なく」助けるよう生まれつき、選択的に助け、時に欺くよう社会化される
- 「志向性の共有」
- 「私たち志向性」
- 互惠性・社会的規範
- 集団同調の両刃性
- 内集団ひいき
- 外集団ぎらい

【参考図書】

マイケル・トマセロ (2013).
ヒトはなぜ協力するのか.勁草書房

10



【参考図書】

ポール・ブルーム (2015).
ジャスト・ベイビー. NTT出版



● **ヒトの赤ちゃん**

- 「ずる」をきらい、「公平」「公正」を当たり前のことと考える
- 意地悪をきらい、親切を好む
- 悪いことをした人を罰することを好む

11



【参考図書】

マーク・S・ブランバーク (2006).
本能はどこまで本能かーヒトと動物の行動の起源. 早川書房



「赤ちゃん学」の狂騒・功罪

「赤ちゃんは天才、何でもできる」って本当？

ヒトの子どもの心の本性を見誤ってはならない

12



乳幼児の力の主たるもの

相互作用するちから

相互作用に引き込むちから

相互作用を通して学び自らを創るちから



子どもは環境や他者との

濃密な相互作用＝「遊び」の中で育つ

13



●「子どもの豊かな遊び/学び」の両輪

●「孤独な科学者としての学び」(Piaget的学び)

●子どもは環境との相互作用の中で学ぶ

●自発的に仮説をもって実験・検証・修正する
→自分の頭で考える力



●「社交的な法律家としての学び」(Vygotsky的学び)

●子どもは他者との社会的相互作用の中で学ぶ

●「2人の心のやりとり」を内面化する
→他者と共同して学び合う力



14



安心感の輪 Circle of Security®

【参考ウェブサイト】

<https://www.circleofsecurityinternational.com>

<http://circleofsecurity.jp>

物理的に「くっついていること」そのものよりも
「いざとなったらいつでもくっつける」という感覚の重要性

15

“Gardener”か“Carpenter”か

「木工職人」よりも「庭師」としての養育者・教師

思い描いていたたった一つの形、完成体を設計図通りに作るよりも、適宜、陽に当て、水やりをする中で、思ってもみなかったところに思いもよらない花を咲かすことを楽しむ

【参考文献】

アリソン・ゴブニック (2019).
思いどおりになんて育たない.
森北出版

後ろをついて回ったり先回りしてコントロールするのではなく、「避難所」「基地」として、ただそこにあり続ける(見護り、探索を促す)こと、そして時に相互作用の積極的相手となることの大切さ

“Exploration”から“Exploitation”へ

子ども期における乱雑の中の「探索」こそが、その後の秩序の中の有効な「活用」につながる

16



Education 2030

(OECD)

『“vuca”な世界を生き抜く力』



Volatility (激動)

Uncertainty (不確実)

Complexity (複雑)

Ambiguity (曖昧)



Agency (責任主体性) / Co-agency (共同主体性)

[自己に関わる心の力] / [社会性に関わる心の力]

17



絵本は

人と人をつなぐ



それ自体が探索の対象となる

そして、遊びを豊かにする



18



並び見る関係の中での絵本

19



たかが絵本、されど絵本

- 絵本がなくとも子は育つ。でも、絵本があればより豊かに育つ、大きな可能性が拓ける。
- 絵本の効果：十分には明らかにされていない。
- あればいいのではなく、どう使うかが問題。
- 絵本は文化が紡いできた究極の遊び・学び・コミュニケーション支援ツール→要は使い方。
- 特に文字や知識習得の入口としての効用大。
- 放っておいても獲得される音声言語(生得的)。ほったらかしでは獲得されない文字言語。

20



【参考図書】

遠藤利彦(編) (2005).

読む目・読まれる目－視線理解の進化と発達心理学. 東京大学出版会

21

「並び見る」関係の中の絵本

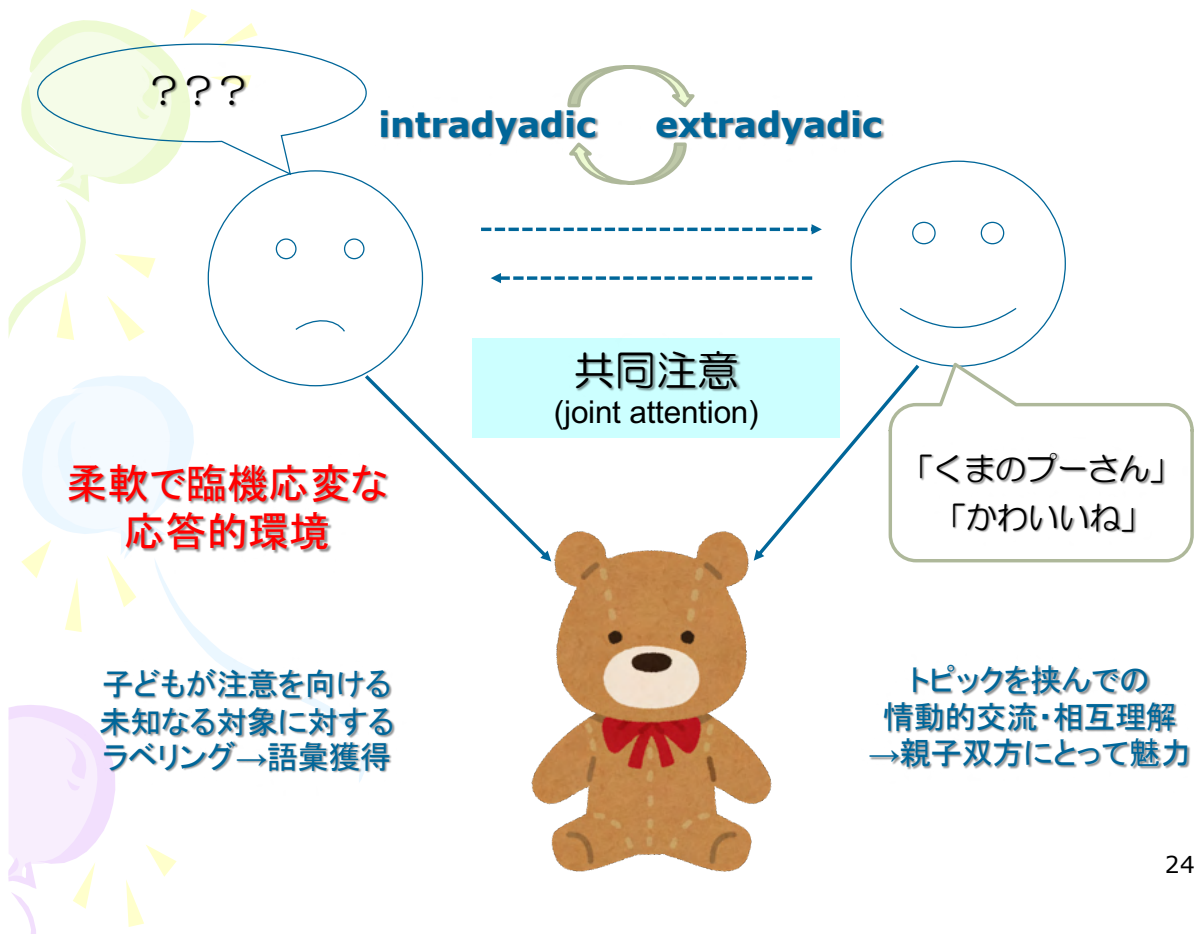
- 見つめ合う(二項)関係→並び見る(三項)関係
- 「9カ月の奇蹟」: 三項関係が拓く発達の可能性
- 殊に日本文化では「共視」に特別な意味合い
- 「共同注意」: 知識・言語・共感性・心の理解・・・
- 「社会的参照」: 世界に遍在する社会的情報の活用→他生物には希な最も効率的な学習機序
- トピックとしての絵本→注意・情意共有の対象
- 絵本: 心的発話が豊かに交わされる(心的発話の豊かさ→後の子どもの心的理解能力を予測)

22

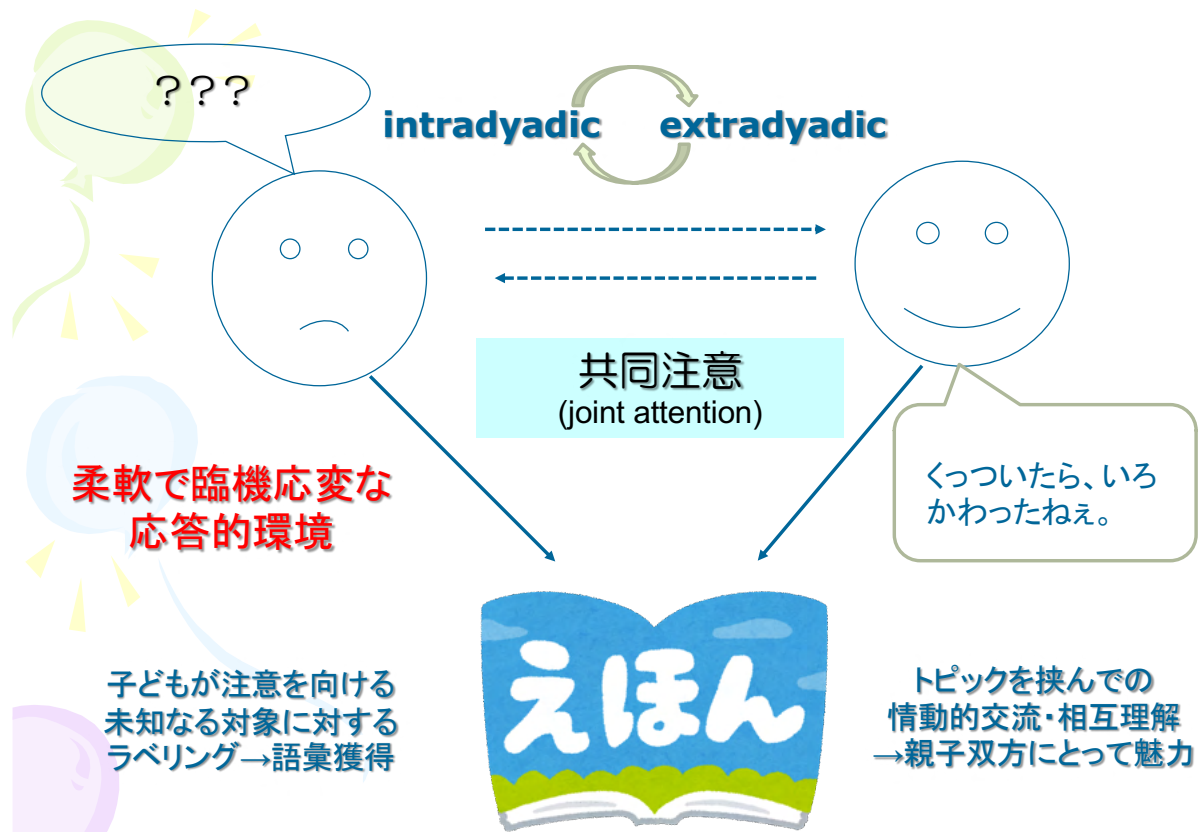


【参考図書】
北山修(編) (2005).
共視論. 講談社

23



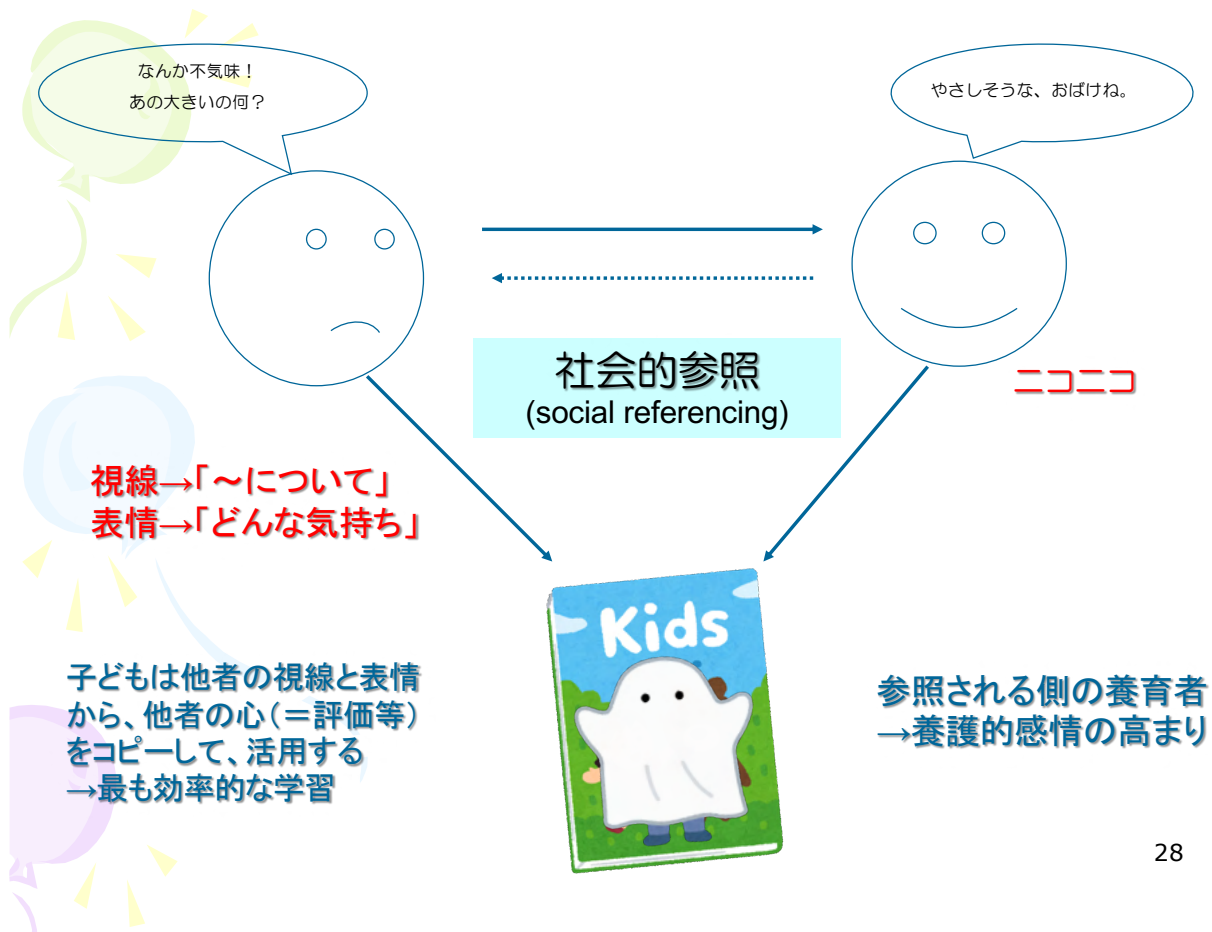
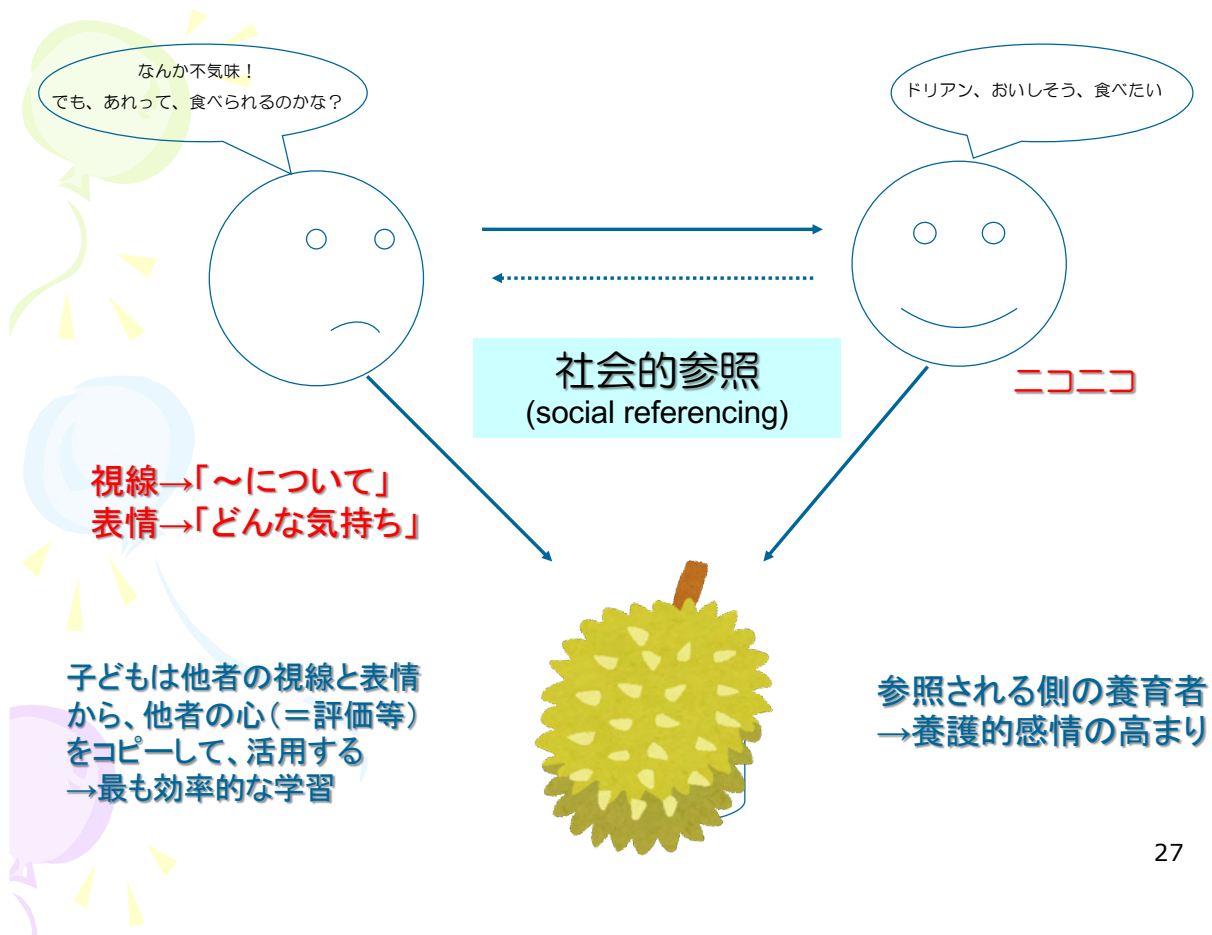
24

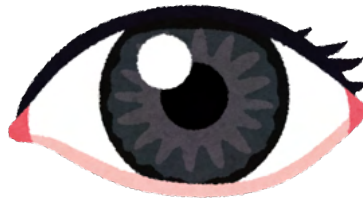


25

- 共同注意(→指さし)
- ものをはさんでそれをトピックに心を通わす
- そこにラベルが持ち込まれてことばが獲得される

26





見る・見られる・見せる
読む・読まれる・読ませる

コミュニケーション・ツールとして のヒトの目の進化

視線→「何について？」 表情→「どんな気持ち？」

29

- **社会的参照**: ヒトにとって最も効率的な学習装置
→「ヒト」の知性の飛躍的進化(Dennett; Tomasello)
- 視線は「～について」: 表情は「どんな気持ち」を
- 子どもは他人の目と表情から他人の心をコピーして、自分の知識とし、判断や行動に活かす

30

- 子どもは生まれながらの自発的な「**学び手**」
と同時によき「**教え手**」を自ら探そうとする存在
- 大人は生まれながらの効果的な「**教え手**」
子どもの学びの姿勢を直感的に察し、促し支える
と同時に豊富な情報を保有し、様々な手段で発信する存在
- ヒトは、子どもの側の学び手としての性質と、大人
の側の教え手としての性質を「**共進化**」させた

→ “**Natural pedagogy**”

(進化・生物学的基盤をもったヒトに固有の教えと学びの仕組み)

- 大人は「**顕示的の手がかり**」を無意識に与え、直感的教育を行う
(アイコンタクト・対乳児発話・誇張動作・随伴的応答・名前の呼びかけ……)
- 子どもは「**顕示的の手がかり**」に反応して、その大人から効率的に
情報を引き出し、獲得し、学ぶ (e.g.「**社会的参照**」)

31

絵本がもたらしてくれるもの

誰かの物語→ぼく/わたしの物語


- 同じ絵本でも語られるストーリーは十人十色
→絵本は徐々に個人化されていく
- 地の文に限定されない多様な相互作用
→子どもに合わせた自由度の高い絵本使用
- 子どもの日常との橋渡し・評価・コメント・(メタ・ルール伝達・発問・認知的打診・足場かけ等)
- 周辺要素からの独自の物語展開(様々なスピンオフ)
- ルーティン化された相互作用・日常よりもやや複雑な言語・「距離化」(非現前状況への誘い)

33

紙絵本は実は究極の「デジタル」

- 紙絵本→アナログ vs. 電子メディア→デジタル
- でも情報の離散性という意味では紙絵本は究極のデジタル(特に頁間には大きな情報断絶)
- 不可視・不可聴:「不在」の魅力と意義→それを子どもなりに埋める・能動的に読む・作る・語る
→想像性・創造性・伝達への動機づけ・工夫等
- 「情報接続」・「情報補完」→ヒトの知性の根源
- 物理的にはシンプルで素朴であることが、発達的には豊かな結果を生み出すというパラドクス

34



【参考図書】
酒井邦嘉 (2011).
脳を創る読書. 実業之日本社

35




- “More is more”

→必ずしもプラスには働かない



- “Less is more”

→創り補うことを通じた自律的発達



- 子どもはなければ求めるし、自分で想像し、創造もする。いやなら主張するし、自分で解決しようともする。子どものちからを信じよう。見まもろう。支えよう。

- 子どもにとって最高の玩具は棒きれ？

36

- 発達科学全般の到達点
動物の実験・人間対象の「自然の実験」
→「環境剥奪/発達早期の環境の乏しさの問題」を解明
- しかし「欠けていることの害悪」の拡張解釈として
「あればあるほどよい」は誤り→早期教育の落とし穴
- 多く与えるほど子どもの発達がうまく進むわけではない
- 「過剰」が子どもの発達に阻害的に働く場合もある
- D. Linden→環境は心と脳にとって「ビタミン」
一定水準までは必須だが、「過剰」は意味をなさない
- 「足りなければ子どもは自分から求めてくるし、探す」
- 子どもの能動性・自発性を信頼する

37

絵本は相互作用のつなぎ役

- 子どもは知情意すべての側面において、他の人との濃密な関係性・相互作用の中で育つ
- 子どもにとっての絵本は単なる教材ではない
- 他者からの読み聞かせ・他者との読み合い
- それは、親子の関係性をつないだり、保育者と子の関係性を紡いだり、そしてまた、子どもの同士で分かち持たれ、絆を結ばせたりする
- 早期段階における絵本の真価→一人使い以上に二人使いあるいは集団使いの中にある
- デジタル絵本にそれがどこまで可能か？

38



デジタル化の 進展と絵本の未来

39



デジタル化の急速な進展

- 日常生活を一変させつつある
 - 人間関係、思考形態、価値観なども変化
 - 子どもは濃密なデジタルメディアの中で育つ
 - 子育ては？ 子育ちは？ 教育は？
- 時代に合わせて変えていかななくてはならない
ところ、時流に動ぜず変えてはいけないところ
- 大人の都合ではなく、子どもの目線で考える

40

● 教育のデジタル化・学校のICT環境化

- PC・タブレット・電子黒板・デジタル教科書・・・
- 「教育の情報化ビジョン」(2011.4.28)
- **GIGAスクール構想**（～2023:1人1台の情報端末）
（デンマーク・仏国・シンガポール・韓国等→ほぼ完全移行？）
- 日本では賛否両論、様々な見方があるが、もはやその方向付けは基本的に変えられない？
- 最も危惧すべきは、教育のICT化が教育の現場と乖離した形で一部の大人目線で(子どもが置き去りにされて)進行/暴走してしまうこと

41

● デジタル機器・デジタルメディア

- 親世代にとっても、もはや生活必需品
- 当然、それは子どもにも及ぶ
- かつて「テレビ」の子どもの発達への影響が様々に議論されたのと同じように、それはいろいろな形で物議を醸す可能性あり
- しかしテレビをなくせないと同じ意味で、それ自体の是非を問うてもあまり意味がない
- 要は使い方**:主体的に、いいものがあれば選び、工夫して使う、危ないものは避ける

42

- しかし、主体的に使いこなすのは難しい
 - 殊に小さな子どもは自ら環境を選べない
- また、学校教育のデジタル化が一般化するとそれが社会の標準・価値観になってしまう
- 「学校でしているんだから悪くはないはず」
 - 社会全体のデジタル化にいつそうの拍車
 - デジタル教育の低年齢化を加速化
- しかし、現実には科学的根拠なく進展・普及
- 長期的視座でデジタル化の効果・弊害を科学的に検証していく必要:そして、弊害があれば、止める、捨てる覚悟と勇気が必要

43

デジタル化によって 子どもの頭はよくなった？

- 時代とともに上昇するIQ値→「フリン効果」
- 現代の子どもは本当に頭がよくなったのか？
- 類似性判断課題の成績上昇→学知の変化？
- 視覚・図形情報処理課題成績の飛躍的上昇
 - デジタル機器との濃密な接触機会の増加？
- 言語・算数・知識→微増:しかし、年齢が上がるにつれて上昇幅が減少→実質、無に等しい
- 21世紀以降、IQ値は頭打ち、むしろ低下!?

44



【参考図書】
James R. Flynn (2007).
What Is Intelligence? Cambridge University Press

45

- 文字文化の衰退！？
- **最近の子どもは早熟**→知性の立ち上がりは早い
が、伸び代が小さい: 小さい子どものうちから
青少年向けのマンガや本は読めても、もっと難しい
大人向けの本が読めるようになる訳ではない
- 社会性・コミュニケーション能力は変化なし
- 日常生活能力はむしろ低下傾向……
- **「文学国語」抜きの「論理国語」だけでいいのか？**



46

紙絵本とデジタル絵本

- デジタル教科書の先駆体→デジタル絵本？
- 絵本アプリの配信増加・安価で入手しやすい
- アプリには多様な刺激・工夫を盛り込める
- デジタル絵本が子の発達にどう影響するか？
- 正負両面の効果→科学的検証の必要性

47

「作り手」視点と「読み手」視点

- 電子メディアの可能性は大きい。しかし、それが同時に思わぬ陥穽にもなり得る。
- 様々な仕掛けを盛り込み、刺激性を強め得る
しかも、インタラクティブ（ただし、中途半端に）
→好奇心旺盛な子の注意・興味を一時的に喚起
→が、時に過大な認知的負荷・刺激や情報過多
- 危惧すべきは「作り手」視点の暴走→「これもできる、あれもできる」：作り込まれたアプリ型絵本→注意捕捉・読み方の強制→用い方の自由度が低減→読み手は受け身に/想像性の欠落

48

- ・「作業記憶」は徐々に発達する。
- ・子どもの頭の中の「作業机」はまだまだ小さい。



- ・一度にそこに多様かつ大量の資料(=情報)を積まれても、うまく整理・処理しきれない。オーバフローする。
- ・その時々(発達時点)の「作業机」の大きさに合った適当な質・量の情報が与えられる必要(資料と資料の隙間に空きスペースが確保されないと効率的な作業はできない)。
- ・脈々と受け継がれてきた絵本文化は、長い伝統の中で暗黙裡にその適当な質および量を見極め、各発達時点の子どもに与えてきた可能性。
- ・しかし、「作り手」視点が優位化したデジタル絵本は、時にそれらを台無しにしてしまうこともあり得るのでは。
- ・今こそ“More is more”より “Less is More”で！

49

切り替えではなく共存・棲み分けを

- ・紙媒体・電子媒体それぞれの強みを「読み手の子ども」視点で最大化することが課題
- ・それも短期的視座(「おもしろそう、ほしい」→売れる)ではなく、**長期的視座(子どもの心の発達に適う)**をもって作り、提供していく工夫
- ・学習型 / 図鑑型 / 物語型絵本……
- ・一人使い / 二人使い / 集団使い……
- ・「どちらがいい」はナンセンス
→「共存・棲み分けの形」を実証的に探そう！

50